

## 社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓

### 第7回若者研究会

#### 1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

#### 2. 研究会基本情報

日時： 2022年6月11日(土) 9:30~12:30

場所： オンライン会議

テーマ： 「離合集散性、移動性、遊動」について

報告者：

1) 西川真理 (琉球大学)

レビュー「社会システム、社会組織、離合集散動態」

研究発表「ニホンザルの群れメンバーにみられる離合集散動態」

2) 鈴木佑記 (国士舘大学)

レビュー「移動、遊動」

研究発表「海民モーケンの遊動性：経済的側面の変化に着目して」

#### 3. キーワードのレビューと概説

##### 霊長類学キーワード・レビュー

「社会システム、社会組織、離合集散動態、fission-fusion」

(西川真理)

霊長類は、多くの種でメンバー構成の安定した複数の個体が集まって生活している。こうした集団生活には、捕食者の発見や回避、食物や繁殖相手の発見、同種の隣接集団との競合などの状況において利益がある。しかし、集団は異なる性・年齢の個体で構成されており、個体によって栄養要求や運動能力に差があるため、集団メンバーは状況に応じて他個体との近接を調整し、時には小集団に分かれて遊動する必要がある。このことが集団メンバーの空間的・時間的な凝集性に変化をもたらす(離合集散動態：fission-fusion dynamics)。集団メンバーの離合集散動態は、その種の社会システム(social system)を理解する上で重要な

要素であり、社会組織 (social organization) を特徴づけるものである。離合集散動態については、チンパンジーやクモザルといった空間的・時間的に広範囲に離合集散する種を対象に研究がおこなわれてきたが、Aureli ら (2008) によって、その度合いを、A) 空間的な凝集性、B) 小集団の個体数、C) 小集団のメンバー構成、の3次元で定量化し、種間/系統間比較に用いることが提案されている。現在では、全地球測位システム (GPS) を併用して空間的な凝集性を定量的に分析した研究が増えつつある。

Aureli, F., Schaffner, C.M., Boesch, C., Bearder, S.K., Call, J., Chapman, C.A., Connor, R., Fiore, A.D., Dunbar, R.I.M., Henzi, S.P., Holekamp, K., Korstjens, A.H., Layton, R., Lee, P., Lehmann, J., Manson, J.H., Ramos - Fernandez, G., Strier, K.B., Schaik, C.P. van, 2008. Fission-fusion dynamics: new research frameworks. *Current Anthropology* 49, 627–654.

#### 質疑応答：

- Fission-fusion の度合を示した Aureli ら (2008) の図においてヒトは B (重層社会、例えばマントヒヒ) と C (流動性の高い集団、例えばチンパンジー) との間ということだったが、どういう民族や生業のヒトを想定しているのか。
  - 論文中では ‘modern human’ と記述されており、狩猟採集民の論文が引用されていた。おそらくヒトはチンパンジーやクモザルよりも、分散した時の多様性が低いと考えられる (学校でも同じメンバー、仕事も同じメンバーというように、ある程度限定されたメンバーでヒトは過ごすのではないか)。
- 自分の欲求を優先することにより他個体から離れるという話がでたが、逆に集団の欲求を優先させるようなことはあるのか。
  - 例えば自分はまだここで休んでいたいのに、他のメンバーが移動を始めたからついていくということがある。また子どもの場合は理想的な移動速度があるが、大人に合わせて歩くのでエネルギーコストがかかっているという指摘がある。

#### 人類学キーワード・レビュー「移動、遊動」

(鈴木佑記)

現生人類をあらわす言葉としてホモ・サピエンス (知恵ある人) が有名だが、他にも研究者たちによってホモ・ロクエンス (話す人) [フライ 1980]、ホモ・ファベル (作る人) [ベルクソン 2010]、ホモ・パティエンス (悩む人) [フランクル 2004]、ホモ・ルーデンス (遊ぶ人) [ホイジンガ 2019] などの言葉が、現生人類の特徴をあらわすものとして名付けられ

てきた。文化人類学者の大貫良夫と形質人類学者の片山一道は、移動することこそが人間の本質の一つであるとして、ホモ・モビリタス（動く人）という概念を提唱している [大貫・片山 1993]。彼らによれば、人間はホモ・モビリタスであることによってはじめて、ホモ・サピエンスやホモ・ファベル、またホモ・ルーデンスたりえると主張する。つまり、ヒトは移動を通じて知恵や工作すること、そして遊びを創造していったというわけである。

ホモ・サピエンスがそれまでの旧人とは異なる新人を指し示す言葉である一方で、ホモ・モビリタスはチンパンジーから区別するものとして用いられていよう。先史人類学者の赤澤威 [2012] は、猿人モビリタス、原人・旧人モビリタス、新人モビリタスとわけて、それぞれのモビリタスの特徴について考察している。川田順三が提唱したホモ・ポルータンス（運ぶ人）も直立二足歩行以降の人類に当てはめて用いられていることから [川田 2014]、ホモ・モビリタスの概念に近いであろう。そうとはいえ、モノを運ぶためには移動が伴うのが普通なので、やはりモビリタスの方が、ヒトの原理をより深く指摘している概念であるように筆者には思える。

動くことがヒトをヒトたらしめる原理の一つであるとするならば、ヒトを対象とする社会／文化人類学（以下、人類学と略す）において移動現象はおのずと調査の射程に入ってくるはずである。実際、人類学の古典の一つとされる、マリノフスキ（Bronisław Kasper Malinowski）の『西太平洋の遠洋航海者』では、クラ交換という船に乗った移動が重要なファクターとなっている。もう一つの古典とされるラドクリフ＝ブラウン（Alfred Reginald Radcliffe-Brown）著『アンダマン島民』においては、アンダマン諸島に暮らす複数の民族が取り上げられており、沿岸部に暮らす人々に関する言及も多々なされている。その沿岸居住者はより良い漁場を求めてキャンプ地を転々とする遊動民であり、魚や貝類だけでなくジュゴンや亀などを狩猟採集すると説明がある。

一般的には、上記 2 冊の刊行をもって近代人類学が開始されたことになっている。ほとんど知られていないが、2 冊刊行の年である 1922 年に、『マラヤの漂海民（邦訳は漂海民族：マウケン族研究）』というタイトルの民族誌的書物が出版されている。執筆者はホワイト（邦訳書ではウワイトとなっているがホワイトで統一） [Walter Grainge White] というイギリス人で、宣教師として英領植民地インド帝国ビルマ州（現ミャンマー）へ派遣された人物である。同書では、モーケンが住まいとして船を利用していることのほか、島々を移動しながら漁に従事している様子が描かれている [ホワイト 1943]。これら 3 冊で取り上げられているのは主に漁撈民の移動／遊動である。

牧畜民を対象とした人類学的調査は、1930 年代にエヴァンズ＝プリチャード（Evans-Pritchard）によって実施された。その成果は 1940 年に、『ヌエル：ナイル人の生活様式と政治制度に関する記述』（The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and the Political Institutions of a Nilotic People）として出版された。気候などの環境の変化に合わせて牛と共に居住地を移動していた様子がつづられている [Evans-Pritchard 1940]。こうした初期の人類学で論じられたのは主に、「辺境」の自然環境社会に身を置いて暮らす特定の

民族の遊動であった。

他方、人工的な環境社会で生活する人々の移動についても、移民を対象とすることにより1950年代から焦点があてられるようになった。国際的な越境はグローバル化の動きと連動している。アパデュライは、グローバルなヒトやモノの流れには以下の異なるディメンションがあるという。それは、エスノスケープ（民族の地景）、メディアスケープ（メディアの地景）、テクノスケープ（技術の地景）、ファイナンススケープ（資本の地景）、イデオスケープ（観念の地景）の5つである。これらのスケープの中でも、特に人の移動に関連するものがエスノスケープである。具体的には、「旅行者、移民、難民、亡命者、外国人労働者といった移動する集団や個人が、世界の本質的な特徴をなして」[アパデュライ 2004:70] いるものである。近年では彼らを調査対象とする人類学的研究が増えており、故郷 (home)、故郷喪失 (exile)、移動・転地 (displacement)、旅 (travel)、ディアスポラ (diaspora)、帰還 (return, return migration, repatriation, homecoming) などの用語とともに盛んに論じられるようになった [大川 2016]。

上記で言及した旅 (travel) が、人類学で取り上げられるようになったのは1970年代に入ってからのことである。例えば1974年にメキシコシティで開かれたアメリカ人類学会のシンポジウムで観光がテーマとして扱われ、その内容は書籍『ホスト・アンド・ゲスト』としてまとめられ、1977年に刊行されている。そこでは、ホスト（観光客を受け入れる社会）とゲスト（観光客）を鍵概念として、世界各地の事例が伝えられている [スミス編 2018]。旅をする主体は観光客であり、彼ら彼女らは居住地を離れ、乗り物などを利用しながら旅先へ移動し、一時的にそこで滞在してからもとの場所に帰る。その旅先でゲストが経験するホストとの関係性は多様であり、現地社会の文化的変容を引き起こしていること等が伝えられた。その後、観光客が対象社会に向けるまなざし（観光のまなざし）が社会的にかたち作られ、メディアを通して再生産されることを論じたもの [アーリ 1995] などが報告され、社会学と人類学において観光は一つの研究テーマとして確立されていった。日本の人類学においても、山下晋司と橋本和也を先導者として、観光を主題とする研究が進められるようになっていく。

「観光のまなざし」という概念を提示した社会学者アーリはその後、移動 (mobilities) そのものを主題として研究に取り組んだ。彼は先行研究をもとに、現在 (出版年 2007 年) の世界における主な移動のかたちを12に分けて紹介している [アーリ 2015:22-23]。以下、一部抜粋する。

- (1) 亡命、難民、ホームレスの旅、移民。
- (2) 出張旅行。
- (3) 学生やオーペアなどの「海外経験」を目的とした若者の見聞旅行。
- (4) 温泉、病院、歯科医、視力矯正機関などへの医療目的の旅行。
- (5) 兵団、戦車、ヘリコプター、航空機、ロケット、偵察機、衛星などの軍事上の移動

- (6) 退職旅行と定年後のトランスナショナルな生活様式の形成。
- (7) 子どもや配偶者、親類、召使いによる「後追い旅行」。
- (8) 華僑のような既存のディアスポラの内部にある主要な結節点を伝う旅と移住。
- (9) 世界中のサービス労働者による、とりわけグローバル・シティへの旅。
- (10) 特定の場所やイベントへの「観光のまなざし」を通じた観光客による旅行。
- (11) 友人や親類を訪ねること。
- (12) 通勤をはじめとする仕事関連の移動。

これらの中で、人類学者が取り上げることの多いものは(1)、(6)、(8)、(10)、(12)であろう。ただし(12)は一般職ではなく、薬草商人やサーカス団などの特殊な仕事に就いている人たちが研究の対象となることが多い[e.g. 林 2004; 林 2007]。近年の(10)の研究動向で興味深いのは、LCCの台頭など空の交通網が発達する一方で、移動手段としての徒歩に着目した人類学的研究が増えていることである[cf. 土井 2015; 古川 2020]。

#### 参考文献

- アーリ, ジョン、1995『観光のまなざし:現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳、法政大学出版局。
- 、2015『モビリティーズ:移動の社会学』吉原直樹・伊藤嘉高訳、作品社。
- 赤澤威、2012「ホモ・モビリタス 700 万年の歩み」印東道子編『人類大移動:アフリカからイースター島へ』朝日新聞出版、7-32。
- アパデュライ, アルジュン、2004『さまよえる近代:グローバル化の文化研究』門田健一訳、平凡社。
- 大川真由子、2016「序 帰還から故郷を問う」『文化人類学』80(4): 534-548。
- 大貫良夫・片山一道、1993「ホモ・モビリタスを発見する:人類の生成・脱アフリカ・適応拡散と非適応拡散」大貫良夫監訳『民族移動と文化編集:変動時代のノマドロロジー』NTT出版、11-78。
- 川田順三、2014『〈運ぶ人〉の人類学』岩波書店。
- スミス, ヴァレン・L 編、2018『ホスト・アンド・ゲスト:観光人類学とはなにか』市野澤潤平・東賢太郎・橋本和也監訳、ミネルヴァ書房。
- 土井晴美、2015『途上と目的地:スペイン・サンティアゴ徒歩巡礼路 旅の民族誌』春風社。
- 林史樹、2004『韓国のある薬草商人のライフヒストリー:「移動」に生きる人々からみた社会変化』御茶の水書房。
- 、2007『韓国サーカスの生活誌:移動の人類学への招待』風響社。
- 古川不可知、2020『「シェルパ」と道の人類学』亜紀書房。
- ホワイト, ウォルター・G、1943『漂海民族:マウケン族研究』松田銑訳、鎌倉書房。
- フライ, D.B.、『ホモ・ロクエンス:ことばを話す動物としての人間』柘矢好弘訳、こびあ

ん書房。

- フランクフルト, ヴィクトール・E, 2004『苦悩する人間』山田邦男・松田美佳訳、春秋社。  
ベルクソン, アンリ, 2010『創造的進化』合田正人訳、筑摩書房。  
ホイジンガ, ヨハン, 2019『ホモ・ルーデンス』高橋英夫訳、中央公論新社。  
マリノフスキ, B, 2010『西太平洋の遠洋航海者』増田義郎訳、講談社。  
Evans-Pritchard, E. E. 1940. *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and the Political Institutions of a Nilotic People*. Oxford University Press.  
Radcliffe-Brown, A. R. 1922. *The Andaman Islanders*. Cambridge University Press.

質疑応答:

総合討論で合わせて議論されたため、特になし。

総合討論:

<バンド、小集団、サブグループの捉え方について>

- 狩猟採集民におけるバンドのあり方は霊長類学における離合集散の動態論からはどのように見えるのか。
  - 霊長類においても集団のメンバーは状況に応じて他個体との関わりを調整する必要がある。それが集団の凝集性に变化をもたらし、メンバーが小集団に分かれてあるいは単独で遊動することにつながる。ともに行動する集団を指す用語として、霊長類種や研究によって違いはあるが、サブグループ、サブユニット、パーティーがある。これらがバンドと相同なのか考えたい。
  - 人類学におけるバンドは、離合集散する社会形態を指すものとして使われる語である。離合集散については、食料を環境から獲得するような社会で、その場所の資源量に応じてポピュレーションサイズを変化させるというような形で論じられる。そのため例えば、現代の日本のような社会をバンドと捉えることはない。
- 人類学におけるバンドは家族関係に加えて、各家族構成員の兄弟が集まってくる親族関係でつながった人びとより成る社会である。人類学のバンドと比較するために、霊長類の小集団のメンバーはどのような関係性にあるのか、小集団のサイズに加えて親族関係について聞かせてほしい。
  - 母系社会の霊長類だと、母と娘あるいは、姉妹が集まって移動する傾向がある。それは血縁で結ばれた集団なので、親族関係に基づくまとまりと言え、バンドに似ていると感じる。
  - 霊長類の重層社会でもバンドという用語が使われるが、限定的な種や集団に対して使われる言葉であって、人類学における用語の使われ方とは異なると思う。バンド

という用語が、人類学では社会を表している、霊長類学では集団を表している点にも違いがあると思う。

#### <移動/遊動することの機能や動機>

- アーリ John Urry が提示した現代世界における 12 通りの人の移動、あるいは、西田が示した遊動民がキャンプを移動させる 5 つの理由を霊長類学者はどのように見るか。  
→アーリの分類は現代の話であり霊長類の移動や遊動と関連付けて議論するのは難しいと思う。西田が示している 5 つの理由は霊長類学からも議論が可能だと思う。特に安全や快適の確保や、資源や食物の獲得、生理的な側面などは霊長類学でも検討がされてきている。移動や遊動の目的を様々な側面から分析していくと、人類学と霊長類学で議論が十分にできると思う。
- 離合集散の要因として、アウレリ Filippo Aureli はコンフリクト・マネジメントみたいなものの一環として離合集散と言っている。コンフリクトの原因となる食物の分布や他集団との関係性における凝集や移動を検討したら、比較可能だと思う。

#### <GPS を用いた調査>

- 霊長類を対象とした研究では 2000 年以降に GPS を使って群れのメンバーの位置を正確に把握する研究が進められている。人類学では人の移動や遊動の研究に GPS を活用することはあるか。  
→人類学的研究の全体像はつかめていないが、GPS を用いた研究もかなり増えてきている。
- 生業活動のトラッキングのために GPS を利用するという事例が増えてきている。例えば、漁労活動に出漁した場所のトラッキングデータと海底の地形のデータを組み合わせて、現地の人々の伝統的知識を調べるという研究例などがある。一方で、霊長類学で実践されているような、個体の動きを追跡するという目的で GPS を利用する例はプライバシーの問題も関わってくるためあまりないのではないかな。

## 4. 研究発表

### 「ニホンザルの群れに見られる離合集散動態」

(西川真理)

ニホンザルは凝集性の高い種であると表現されることが多いが、その離合集散動態、特に空間的・時間的な凝集性を定量的に示した研究はほとんどない。そこで、鹿児島県屋久島に生息する野生ニホンザルの群れ (E 群) のオトナメスを対象に、空間的・時間的な凝集性を定量化し、その変異に影響を与える要因を調べた。調査は、GPS 受信機を携帯した二人の

観察者が同時に別の個体を追跡することで、追跡個体同士が視界外に位置した場合も含めてその位置情報と行動データを記録した。調査地の視界範囲は約 20m である。屋久島には複数のニホンザルの群れが生息しており、群間採食競合が高いことが知られている。また、サルの捕食者はいない。

得られた位置情報から二個体間距離 (IID) を算出した結果、IID には 0-618m の変異があり、中央値は 47.7m であった。オトナメス同士は主に音声の届く範囲内 (<200m) で遊動していた。離散継続時間の平均は 25.7 分であった。IID は活動タイプ、順位関係、血縁関係によって説明され、採食・移動の時は毛づくろい・休息の時より長く、高順位個体間は高順位と低順位個体間および低順位個体間よりも短かった。血縁がある個体間の IID のほとんどは、通常の鳴き交わしに使う音声が届く距離 (<100m) より短く、強い音声が届く距離 (200m) より長いことはほとんどなかった。

採食と移動の時に IID が長いことから、採食競合を回避するために凝集性を低めることが示唆された。こうしたメンバーの分散は、捕食者がいないことで可能となり、低順位個体が凝集性を柔軟に調整することで生じると考えられた。毛づくろいと休息の時には凝集性が高まることから、これらの活動が群れメンバー間の親和性を維持することに寄与していると考えられた。個体同士が 100m を超えて分散することは、主に非血縁の個体間で生じており、血縁のないメンバーは小集団に分かれて遊動を共にしないサブグルーピングが生じている可能性が示唆された。以上のことから、ニホンザルの群れメンバーは、いつもまとまって遊動しているのではなく、その凝集性は活動タイプや社会関係によって変化し、主に音声によって互いの位置を把握できる範囲内で離合集散していることが明らかになった。

#### 【一言感想】

霊長類学からのレビューと研究紹介は、集団生活に付随する利益と不利益を基盤として、集団の行動圏 (遊動域) の中でみられる集団メンバーの離合集散について扱った。一方で、人類学からの発表は、ヒトの拡散や移動性といった長期的・広範囲な視点からの発表であった。そのため、注目している現象の時間軸や空間範囲にズレがあり、霊長類とヒトで直接的に比較することは難しかった。しかし、今回の研究会を通して、霊長類においても、長期データ (数年~数十年) を用いることで、移動性にかんする比較検討は可能かもしれないという視座を得ることができた。なお、霊長類学と人類学で共通して用いられる用語 (例えば、バンド) は、その意味が分野間で違う場合があるので、用語の取り扱いには注意する必要性を感じた。

#### 質疑応答：

- ニホンザルの視力はどの程度なのか。視界がどの程度ひらけているかは観察可能だが、サルはどのくらい見えているかわかるのか。  
→ 霊長類の視覚はヒトとほぼ同じという前提で研究されている。物理的に遮られて



いると見えないが、人間が見える範囲はサルも見えている。ただサルの体高は50cmくらいなので、その点は考慮する必要があると考える。

### 「海民モーケンの遊動性：経済的側面の変化に着目して」

(鈴木佑記)

『人類史のなかの定住革命』(2007年、講談社)において西田正規は、現在の遊動民が居住地(キャンプ)を移動させる理由として、(1)安全・快適性の維持、(2)経済的側面、(3)社会的側面、(4)生理的側面、(5)観念的側面を挙げている。(1)は風雨、洪水、寒冷、酷暑といった厳しい自然環境から逃れるための理由、それにゴミや排泄物といった生活を送る上で出てくる不要物に囲まれた場所から逃れるための理由がある。(2)は食料、水、原材料を得るためであったり、交易や協同で狩猟をするためであったりする。(3)は自集団内や他集団間との緊張関係を解くためにその場を離れること、儀礼や行事への参加や情報交換を目的としたものがある。(4)は肉体的ないし精神的な癖としての移動のことである。(5)は死者の出た場所や死体から遠ざかるためであったり、災いから身を守るための逃避であったりする。ここではキャンプ地の移動が想定されているが、日常における短期間・短距離の移動についてもある程度適用可能だと筆者は考える。本発表では、(2)の経済的側面に着目して、モーケン事例に彼らの遊動性について考察している。

モーケンとは、タイ領とミャンマー領のアンダマン海域に暮らす漁民である。かつては船を住まいとして移動性の高い生活を送っていた。今から200年程前から彼らに関する記録が残されており、そこにはナマコなどの海産物を採捕していたことが記されている。約100年前の書物には、1~4.5メートルくらいの浅い海域でナマコを採っている様子を描いたものもある。船でアンダマン海の広域を移動しながら、特段国境を意識することもなく各地で「自由」に漁に従事していたことがわかっている。

そのような移動が常態であったモーケンの生活形態を大きく変えるきっかけとなったのが、1980年代以降タイ領アンダマン海域で進められている国立公園化である。国立公園に指定された地域では木材伐採や狩猟採集が基本的には許されない。そのため、モーケンは住まいであり生業手段でもある船を造ることが困難となり、漁を自由に行えなくなってしまった。とはいえ、スリン諸島では村落を設けることが特別に許され、自給できるだけの漁は黙認されている。そのスリン諸島では周辺海域のみで漁が行われるようになり、各世帯は十分な漁獲を得るためにより深い海に潜るようになっている。2014年末に発生したスマトラ沖地震・津波によって船を失ったが、国内外の支援団体が船を寄贈するようになり、船の数が以前よりも増えたために漁獲競争が激化した。2016年以降はルア・プリートと呼ばれる小型船が導入され、従来の船よりも機動力が高くなり、狭い海域を早く移動して漁をするようになっている。従来の広い海域を移動して浅い海で漁をする形態から、狭い海域をより早

く移動して深い海で漁をする形態へと、遊動性のかたちを変えながら生存空間を確保している様子を報告した。

【一言感想】

総合討論で興味深かったのは、人類学では移動を mobility、遊動を nomadism と表すことが多いのに対し、霊長類学では移動は movement、遊動は ranging と表現するのが一般的であることだった。また、霊長類学では、移動はアクティビティを示すものとして使用し、遊動は食べ、休み、移動する行動を指すものとして用いられる傾向にあるということだった。その他、狩猟採集民を取り上げた際に用いたバンドの用語が、人類学者と霊長類学者との間で捉え方が異なる点についても印象的であった。

質疑応答：

- S氏の移動の事例は、かなり頻繁に移動しているように感じたが、これは一般的な事例なのか。  
→ 1945年頃に生まれたという彼の年代を考えると一般的だといえる。現代とは異なり、この時代の人々はかなり頻繁に移動していた。
- ナマコ漁について
  - ・ 雨期と乾期でナマコの捕れ方などは異なるのか。  
→ ナマコ漁に元々適しているのは乾期で、雨期だとそもそも海にでられない時期（1週間以上）があるので、ナマコ漁に行く機会が乾季に比べて少ない。さらに以前であれば潜ることのなかった海流の激しい場所、危険度の高い場所でも潜るようになっている。
  - ・ そうした変化に伴って、危ないところで潜る際にはどうしたら良いなどと、以前は言われなかったこと（命綱をつけておくなど）が語られるようになったか。  
→ そういうことはないが、自分が潜れないところでは潜らないのが基本である。彼らは自分の身体能力や可動範囲をよく理解しており、自分ができないところでは無理して潜らない。
  - ・ そうしたことは溺れるなどの経験によって学習するのか。  
→ おそらく経験もあるだろうし、親から教わった部分もあると思うが、よく分からない。自分の経験からすると、自分もおぼれそうになったり流されそうになったりするなかで、ここはやめようと思ったりするようになった。

総合討論:

<移動と遊動>

- 移動と遊動はどう違うか。定義はあるのか。

(人類学における観点)

→人類学においては、明確な定義はないと思う。これまでの狩猟採集民研究者や牧畜民研究者が遊動という言葉を使用しているが、遊動民を明確に定義したものは見つからなかった。現在では完全な狩猟採集生活を送っていないかかつて狩猟採集生活をしてきた人たちや、比較的遊動的な牧畜生活を送っていた人たちのことを指して遊動民と言っているのではないか。移動という大枠の中に遊動があり、遊動は狩猟採集民あるいはポスト狩猟採集民や牧畜民を表すのに現在でも用いられているという印象がある。

→遊動 nomadic, nomads というのは活動(アクティビティ)に基づくが、移動 move は単なる行動(アクション)という分類の仕方もあるのかもしれない。一方で、移動民とか遊動民と言うときには違いは出てこないという感じに受け止めている。

→遊動と言うときには、基本的には野生の動植物を獲得することや、そのために拠点を移す場合に用いられていると思う。より自然と密接した自然に依存したような生産のあり方をしているような人たちが移動するときに、遊動という言葉を使う印象がある。

→もともと居た場所に戻ってくるのか、水とか食糧があるかもしれないという予見性が働いて移動するのか、あるいは本当にあてもなく未知の場所に行くのが移動なのか等、様々な論点があるように思う。

(霊長類学における観点)

→移動と遊動は使い分けている。移動というときは、ある場所から他の場所へうつる動きそのものを移動と言ひ、遊動は食べたり休んだり移動したりしながら場所が変わっていくその全体を遊動と呼んでいる。

→遊動に対応する英語として nomad あるいは nomadic という単語を使うことはほとんどない。遊動は英語では ranging behavior と表される。移動は movement、遊動は ranging にあたる。nomad は日本人研究者が訳語として使っていたことがあるが、英語圏では使わない。やはり遊牧民との関連性が強いので、nomad は使われない。

<環境の変化による移動形態の変化(人為的な影響)>

- 霊長類において、環境の変化により生じる新たな移動形態というのはあるのか。たとえば、屋久島は保護されているので人間による開発が及ぶということはほとんどないと思うが、観光客が訪れるようになることでかつての遊動域が狭まったり、その結果として移動のあり方が変化したりすることがあるのか。

→先行研究を読んでも、それほど現在と群れのあり方やグルーピングの様態に違いがあると感じたことはない。観光客が増えたことが大きな影響を与えたという印象はない。調査地は国立公園の中で狩猟が禁止されている地域なので人による狩猟の脅威は及ばないが、隣接した狩猟が行われている地域ではサルが罠にかかり獲られることがあり、サルの密度や行動圏の変化は起きている。

→屋久島の調査地内では、餌付けの禁止などの努力をしてきているので、人為的な影響は抑えられている。観光を目的とした餌付け群では遊動域が狭くなり個体数も増えて、人との軋轢が増えている。屋久島の調査地内では人為的な影響は限定的だが、日本全体でみれば観光の影響は非常に大きい。

→サルの行動圏の中に新しくダムが造られたことがある。群れのまとまりや移動は調査していなかったが、行動圏が直線距離で5キロくらい移動した。人間の活動による生活環境の変化が、サルの行動に影響するという事例はある。

#### <環境の変化による移動形態の変化(自然環境の影響)>

- ナマコの資源量に応じて異なる生業活動や移動形態をとるようになるのは、霊長類でいうと季節変化と関連するのではないか。
- ニホンザルも季節によって食べるものが変わり、食物が行動圏の中にどのように分布しているのかで移動の仕方や群れの集まり方が変わってくる。同じようなことはチンパンジーでも見られ、主要な食物がたくさんあるときは凝集するし、少ないときはバラバラになる。環境の変化ということには、人為的な変化だけでなく自然の生態的な変化もある。他にもオスにとっては発情メスが資源だという考え方もあり、資源の分布と移動形態の関連を考えれば、人類学と霊長類学の接点になるかもしれない。このような考え方は、社会生態学として、霊長類学では広く検討されてきている。
- サルも季節によっては一日に数kmを移動することもあるし、逆に数百mも移動しないこともある。

→霊長類においても生息している環境によって移動が異なるというのが面白い。接続の仕方としては資源の分布のあり方でどう動いているとか、季節変化のあり方の違いとかもこれから比較できるのではないかと思う。

→移動と遊動をキーワードとしたため、移動することを前提として考えてきてしまったが、サルがほとんど動かない日やよく動く日があるということから、非移動のあり方というのも多様なのではないかという気がしてきた。どのように移動するのか、なぜ移動するのかだけでなく、なぜ移動しないのかといったところも考えないといけないと思う。

#### <移動/遊動におけるメンバーシップ>

- 漁に出るときは、何人かで乗り合わせて行くのかあるいは、個人で行くのか。もし乗り合わせて行くなら、そのメンバーは親戚同士とかメンバーシップに決まりがあるのか。  
→比較的船の数が少なかった時期は、特に誰と行くというよりは親族も含め仲の

いい人たち同士で船に乗って、できるだけガソリン代を節約しながら漁をしていた。船が多く寄贈されてからは、主に親族同士で乗り合わせるが多くなった。より小型の小さなボートを導入してからは個人で行く人がかなり増えているという状況である。

→時代に応じてグルーピングや漁に行くときの集まりが変わっている。

● 狩猟をするときにはどのような集団で行くのか。

→バンドソサエティは親族関係をもとに形成される社会関係人々の集まりなので、全員がどこかで親族になる。親族とはいっても、その時々仲のいい人と悪い人はおり、一緒に狩猟に行くのはその時に仲がいい親族ということが多い。

● ヒトの場合は姻族の側も親族関係をたどることができるが、霊長類の場合、親族を意識しているのかどうなのか。親族の関係の築き方、親族の認識の仕方がヒトと霊長類とどう同じでどう違うのか気になる。

→サルの群れの観察を続けていると、親子関係などから家系図を人間側で作ることができる。それをもとにサルたち自身の社会交渉をみると、やはり、母娘や姉妹同士で最も頻繁に交渉がみられる。さらに広い親族関係、たとえば叔母姪関係になると、母子あるいは姉妹よりも交渉時間が少なくなり、もっと遠い親族関係になると、全くしないわけではないが積極的に頻繁に交渉する姿勢が薄れるように思う。そのような行動的な違いを見ると、何かしら自分と幼少期から付き合いがある相手とそうではない相手は区別しているだろう。

● ボノボの離合集散動態は親族関係と関連しているのか。

→母と息子はいつもおおよそ一緒にいるが、それほど親族関係は影響がないように思う。母-息子が基本的に最小単位になり離合集散しているように感じる。ただ、私が見ているボノボの集団はあまり離合集散をしないため、あまりよく分からないというのがある。チンパンジーの場合は、どんどんメンバーシップが変わっていくが、ボノボの場合は、一度分かされるとそのままのメンバーシップでずっと行動し、また元に戻るといった形態をとっている。

(以上)